励まし表現の日米語対照研究

―スポーツ映画における談話分析―

異文化コミュニケーションゼミナール　1214091　髙正　康平

1.　研究動機・研究目的

人は自分が落ち込んでいる時や何かに挑戦しようとする際、誰かに励まされることによって思いがけない力を発揮する。幸運なことに私自身、大学生活の中で非常に多くの「励まし」の機会に恵まれた。しかし、選手が心を開いて様々な話をしてくれることは嬉しい半面、さらに良い励ましができたら、不安を取り除き、良い結果を出す手助けになるのではないかと自問自答する日々だった。しかし、その励まし方によってはむしろ逆効果となり、さらに不安にさせる結果になることも事実である。そんな危険な薬品のような物を上手く操作するためには、効果的な励まし方法を用いる必要がある。一方、さりげなく放った言葉によって周りの人々の心を動かす人がいるのも事実である。その代表例として、米国では、「ペップトーク（pep talk）」と呼ばれる「人を励ます話術」が日常でもよく用いられており、スポーツ現場では、試合前のロッカールームでコーチが 1 分くらいの話をし、選手はその言葉を聴き感動に打ち震えながら、雄叫びを上げてグラウンドに飛び出していくというような光景である。そこで今回は、選手のやる気を高め、落ち込んでいる・不安を抱えている選手を良い心理状態に戻す、効果的な励まし表現について研究したいと考え、本研究に至った。

本研究においては、スポーツ映画を用いて日本と米国における「励まし表現／expression for encouragement」に焦点を当て、その違いを分析・比較し、それぞれの言語の特徴や類似点を研究することを目的とした。そして最終的には、日米語における最も効果的な励まし表現モデルを構築した。

2.　研究方法

本研究では、2000 年以降の日米語のスポーツ映画における「励まし表現」を含む談話を分析対象とした。収集したデータの中から、各 300 の談話を抽出し、それぞれ言語表現（verbal expression）と非言語表現（nonverbal expression）に分類した。言語表現に関しては、「励まし表現」を含む談話において使用された主語・文型・時制・呼称表現について分析した。また、非言語表現に関しては、談話時のボディータッチについて分析し、ボディータッチの有無や、接触した部位について観察した。なお今回の分析では、観察された女性の励まし表現が極めて少なく、男性との比較が困難であったため、男性の発話のみを対象とし、日本語と米語における相違点や類似点を検討した。

3.　主な結果と考察

テーマの中心（主語）の分析結果から、「励まし表現」に用いられる主語は、1. 聞き手中心の主語、2. 話し手中心の主語の順番で頻度が高かった。また、日本語は米語より聞き手中心の主語の頻度が高かった。このことから、基本的に励ます際には、聞き手中心の会話であるが、日米の文化の違いにより、日本はより相手のことを尊重し、相手中心の会話をすることが示唆された。文型に関しては、日米ともに 1.平叙文、2.命令文、3.感嘆文、4.疑問文の順番であった。このことから、励まし表現においては、疑問文や否定文のような形は避け、単純な平叙文や命令文が好まれることが示唆された。また米語においては命令文の頻度が高いことから、日本語よりも自己主張が強く、攻撃的な表現を多用することが観察された。時制においては、日本語は現在～未来志向、米語は現在志向 が多かった。このことから、日本人と欧米人の文化と思考の違いが大きく影響していることが示唆された。呼称表現呼称表現については、米語のほうがおよそ 2 倍の回数であることが示された。このことから日本語と米語において、他者との関係性が著しく異なり、誰とでも親密に接する欧米人に対して、日本人はタテ社会要素が強く、呼称表現が少ないことが示された。ボディータッチ分析結果から、米語は日本語の 2 倍の使用回数となった。このことから、米語において他者との物理的距離が非常に近いことが推測された。日本語と米語の共通点として、肩に対するボディータッチが最も多く、全体の 4 割を占めることが観察された。このことから、肩に対する接触は、相手に対する励ましを顕著に示しているということが示唆された。

4.　結論

テーマの中心（主語）において、日本語は聞き手中心型のソフトメッセージであるのに対して、米語では積極的な聞き手中心であり、自己主張が強いということが示された。意思疎通のスタイル（文型）に関しては、日本語では、他者を思いやる消極的肯定型が多く用いられており、米語では積極的で攻撃的な文型を使うことが多いということが観察された。志向スタイル（時制）においては、未来志向が強く、肯定的な表現を好むのが日本語の特徴であり、現在志向が好まれ、未来や過去についても言及するのが米語の特徴であった。対人関係スタイル（呼称表現）については、日本語では、タテ社会中心で社会的なポジションを好む傾向が強いことに対し、米語では役職や社会的ポジション意関わらず、水平的な関係を築く傾向が強いことが分かった。最後にボディータッチに関しては、日本語が消極的であるのに対し、米語は積極的に接触を図るということが示唆された。

5.　卒業論文の執筆を終えて

本研究を進めるにあたって、丁寧に指導してくださった須藤教授には大変お世話になりました。また、卒業論文の手直しをしていただいた蒲原先生、いろいろ協力してくれた同期のみなさんにも感謝しています。ありがとうございました。